東方の夢

ボナパルト、エジプトへ征く

両角良彦

東方の夢

ボナパルト、エジプトへ征く

両角良彦

講談社

両角良彦（もろずみ・よしひこ）
1919年，長野県に生まれる。1941年，東京大学法学部を卒業，商工省に入る。1971年，通産事務次官に就任。1973年に退官。現在，電源開発株式会社総裁。著書に『1812年の雪——モスクワからの敗走』（第29回日本エッセイストクラブ賞受賞），訳書に『クレオパトラ——消え失せし夢』（ブノワ＝メシャン著）がある。

東方の夢
——ボナパルト、エジプトへ征く
昭和五十七年四月二十六日　第一刷発行
定価　一四〇〇円
著者　両角良彦
©Yoshihiko Morozumi 1982 Printed in Japan

発行者　加藤勝久
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目三一三　郵便番号一二三
電話　東京(〇三)九五二一一二一（大代表）振替東京八一五三〇
印刷所　慶昌堂印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
落丁本・乱丁本は、ご面倒ですが小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN-4-06-145921-X（学2）

東方の夢――ボナパルト、エジプトへ征く　目次

背景素描……11
序　章　青年将軍……15
1　ブオナパルテ　16
2　純粋な英雄　25
3　危ない賭け　32
第一章　エジプトの誘惑……39
1　無主物　40
2　買われた男たち　48
3　サーベルの追放　53
第二章　北西の風……61
1　兵と船　62
2　生ける百科辞典　70
3　愛の二重唱　75
第三章　地中海の真珠……81
1　洋上の奏楽　82
2　聖ヨハネ騎士団　86
3　断崖とオレンジ　90

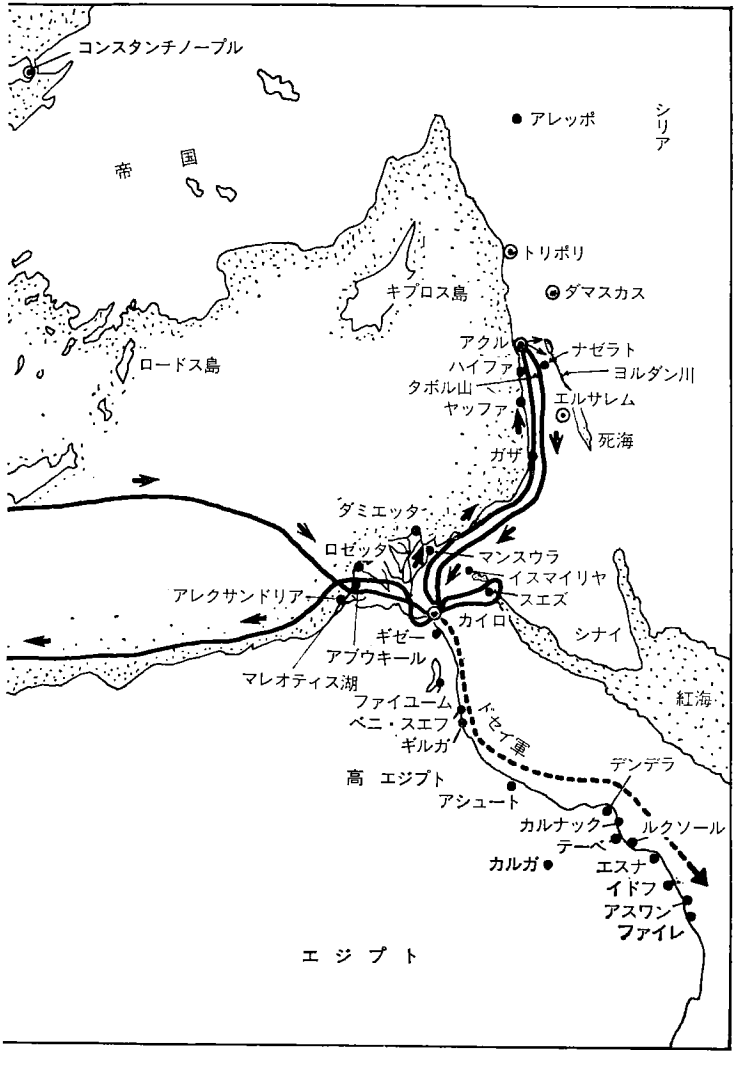
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四章　火の父……97
1　サタンの子供たち　98
2　わめく城壁　104
3　異様な敵　116
第五章　ナイルの岸辺……131
1　獅子の顔　132
2　勝利の都　141
第六章　破滅の海……151
1　ためらい　152
2　巨艦爆沈　159
3　ナイル男爵　167
第七章　イスラームの友……179
1　神の掟　180
2　交歓　188
3　不安の波紋　196
第八章　エジプト学士院……207
1　錬金術師たち　208

2　金字塔　212
第九章　暴徒と美女……221
1　聖なる戦い　222
2　無力な老人　229
3　ティボリ亭　236
第十章　ファラオの国……243
1　はだしの行軍　244
2　埋もれた運河　255
第十一章　地獄の聖地……261
1　はるかなインダス河　262
2　マリアの井戸　268
3　天罰　277
第十二章　十字軍の古城……287
1　屠殺人　288
2　宿敵　293
3　こがね虫　299
第十三章　作られた勝利……309

1 テ・デウムの祈り 310
2 挫折 318
3 阿片 328
第十四章 報復……341
1 政治的遊弋 342
2 白ひげのパシャ 348
第十五章 故国が呼ぶ……357
1 秘密の決意 358
2 ベネチアの船 370
3 熱狂 377
終章 残照……385
1 神の道具 386
2 私有物 395
3 海鳴り 402
あとがき……408

遠征図


コンスタンチノープル
帝国
アレッポ
シリア
トリポリ
キプロス島
ダマスカス
ロードス島
アクル
ナゼラト
ハイファ
ヨルダン川
タボル山
エルサレム
ヤッファ
死海
ガザ
ダミエッタ
ロゼッタ
マンスウラ
イスマイリヤ
アレクサンドリア
スエズ
カイロ
ギゼー
シナイ
アブウキール
マレオティス湖
紅海
ファイユーム
ベニ・スエフ
ギルガ
イシス運
デンデラ
高 エジプト
アシュート
カルナック
ルクソール
テーベ
カルガ
エスナ
イドフ
アスワン
ファイレ
エジプト

トルコ
アドリア海
チヴィタ・ヴェッキア
ローマ
ナポリ共和国
ナポリ
コルフ
エーゲ海
クレータ島
ティレニア海
イオニア海
シチリア王国
ゴツォ
ラ・ヴァレッタ
マルタ島
チュニス
地中海
ベンガジ
トリポリ

装幀／山岸義明

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

東方の夢——ボナパルト、エジプトへ征く

エジプト遠征こそはナポレオンの非凡な叙事詩的生涯で最も華麗な戦いだった。

（ジャン・ティリイ）

背景素描

東方の夢

オリエントと総称されるエジプト、シリア、トルコなど東方の諸国は、ギリシアの昔から西方の住民にとっては未知の、そして憧憬の対象だった。西欧世界とはまったく異質な古代文明の遺産を守り、奇異な神々の集団が住みつき、象牙、香料、織物など貴重な物産をもたらす、どこか不気味な、それでいて好奇心をそそられる相手である。

アレクサンドロス大王は、ナイル河からインダス河にまたがるマケドニア大帝国を建設し、哲人、賢人を引具してギリシア文化をこの東方世界の隅ずみにまで広めようとした。スサでは大王、部将たち、兵士らと現地女性との集団結婚式まであげている。東西世界は文化的、人種的融合に向かうかにみえた。

ところがカエサル以後のローマの時代に入ると、共和国の人びとは東方世界を文明の辺境に押しやり、世界の重心をあまりにも西に移行させてしまう。そして、ローマ軍はただ武力の主体であり、もはやローマ文化を担っては動かなかった。アントニウスはパルチア（今日のイラン）の騎兵に矢ぶすまを浴びせられて潰走し、オクタヴィアヌスは「ナイルの蛇」クレオパトラ七世を自殺に追いやる。

ローマは東西世界の交流を断絶させてしまった。わずかに東ローマ帝国が東方圏に余命を保ったにすぎない。

六二二年のイスラーム革命は東西の溝をさらに深く掘りこんだ。両世界の対立には地理的、文化的なものに宗教的なものが色濃く影を落としてくる。回教対キリスト教という図式である。十

一世紀末からの十字軍とトルコ軍の百五十年にわたる聖地攻防は、双方に度し難い狂信の徒というイメージだけを定着させてしまった。

回教文化の開花とともに、東方世界からの深刻な反動は避けられなかった。つとに九世紀からサラセン軍は西方世界に進撃をはじめる。ビザンチン帝国は崩れ落ち、回教圏ははるかアフリカの北西岸からスペインの南部にまで伸びていった。それからは、トルコ帝国の特殊な支配構造の下に、東方世界は繁栄とそれに続く長い停滞の時間を迎える。

十六世紀に入り、西欧世界が中世の暗黒を抜け出てルネッサンスの門をくぐったとき、忽然と東方世界への郷愁が復活した。科学と技術の進歩は眠れる東方に対する優越性を保証してくれよう。いまやオリエントは過去の脅威のすべてを喪い、往時の魅力のすべてを蘇らせた。

「東方の夢」がふたたび人びとの心を捉える。重商主義と植民地待望論が頭を持ちあげたのは自然の成り行きだった。まず、イギリスのインド経営が開始される。大革命の試錬を経たフランスも、アメリカでの植民地の喪失を償うべく、新しい時代の新しい目標に向き直ることになろう。

「歴史という、原因と結果のきびしいつながりのなかに、どうして夢が介在できるのかと問われるかもしれない。ところが、歴史上の事件を織りなす糸がほぐれて、思わぬ自由が次から次へと拡がってゆくことがときにないとはいえない。やがてその動きは急となり、速さを増し、うね

りとなって高まり、輝きを放って、不可能とみえたことまで手が届きそうに思えてくる。

そこに、当人の力にはあまりそうな夢に浮かされた一人の男が不意に出現する。この男は前に押しやる抗い難い力に振り廻され、とりつかれ、あげくは身を灼かれてしまう。よくいわれるように『奴は夢の餌食になった』のである。まさにこの言葉は文字通りに受けとめねばならない」

（ブノワ＝メシャン）

夢はロマンであり、現実の容赦ない厳しさにつぶされる、美的な回想の対象にすぎないかもしれない。けれども、われわれは冷酷な因果律の支配する世界に彩りを添え、陰影を与える絵の具として、あえて人間が歴史に挑戦する夢にこそ温かい共感を覚えないだろうか。

いま、はるかな東西交渉の歴史を背景として、「東方の夢」にふととりつかれた一人の若者、つまりボナパルトが登場しようとする……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com